

## 執筆 者 紹 介 (掲載順)

佐藤正人 (さとう・しょうじん)

一九四二年オタル生まれ。三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者(李基允・裴相度)の追悼碑を建立する会、紀州鉾山の真実を明らかにする会、米空母に反対する市民の会、海南島近現代史研究会の会員。

藤井幸之助 (ふじい・こうのすけ)

一九六一年高槻市生まれ。在日朝鮮人史・民族まつり/マダン研究。神戸女学院大学非常勤講師。コリアン・マイノリティ研究会世話人。在日韓人歴史資料館調査員。アプロハムケネットワーク大阪(朝鮮学校友の会)事務局。編著書『ある在日コリアン家

族の物語 つないで、手と心と思い 絵と物語で読む在日100年史』(アットワークス)など。

小野俊彦 (おの・としひこ)

一九七四年北九州生まれ。パートタイム労働者。未組織貧民。九州大学大学院比較社会文化学府単位取得退学(朝鮮戦争期の北九州における港湾労働社会史等を研究)。二〇〇六年に誰でも一人でも不安定でも入れる労働/生存組合「フリーターユニオン福岡」を組織、一〇年三月脱退。エッセーに「プレキャリアート」に工作を(本誌第二号)、「フリーター」から「民衆」へ(本誌第三号)など。

崔真碩 (ちえ・じんそく)

一九七三年ソウル生まれ、東京育ち、広島在住。訳者/役者。広島大学大学院総合科学研究科准教授。テント芝居「野戦之月海筆子」の役者。編訳書に『李箱作品集』(作品社)、主な出演作に野戦之月海筆子『変幻痴殻城』(二〇〇七年七月東京、九月北京)、主なエッセーに「影の東アジア」(『残傷の音』岩波書店)、「野戦之月海筆子になる」(本誌第二号)、「腑抜けの暴力」(本誌第三号)など。

太田直里 (おおた・なおり)

一九七九年京生まれ。京都造形芸術大学で染織を

学びながら音楽活動をする中で、社会運動に興味をもつ。音楽で芝居に関わり、以降、自ら芝居を創ることを試みる。作・出演『あさやけやけて』(西部講堂)、井上讓と共同作・出演『夢がさめたら』(長居公園)、作・出演『夜光客』(ミック)。主なエッセーに「排除される者の表現」(本誌第二号)など。現在、野戦之月海筆子にて活動中。

#### 高田里恵子(たかだ・りえこ)

一九五八年神奈川県生まれ。東京大学文学部、同大学院人文科学研究科博士課程修了。ドイツ文学専攻。桃山学院大学経営学部教授。著書に『文学部をめぐる病い』(ちくま文庫)、『グロテスクな教養』(ちくま新書)、『学歴・階級・軍隊 高学歴兵士たちの憂鬱な日常』(中公新書)など。

#### キムチヨシミ(金静美)

一九四九年大阪生まれ。三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者(李基允・妻相度)の追悼碑を建立する会、紀州鉾山の真実を明らかにする会、海南島近現代史研究会の会員。東アジア史研究者。著書に『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』(水戸運動史研究 民族差別批判)、『故郷の世界史 解放のインターナショナルリズムへ』(いずれも現代企画室)など。

#### キム・ヨンイル(金泳逸)

一九八三年東京生まれ。元・模索舎々員。フリーター全般労働組合議長。よこはまシティアニオン執行委員(専従)。アナキズム文献センター運営委員。

アナルコ・サンディカリスト・ネットワーク東京に参加、自らが加入している組合に限定せず労働者のネットワークキングに取り組んでいる。

#### 玉川晴野(たまがわ・はるの)

大阪在住。在日韓国人三世。アルバイトや派遣社員をしては、金の続く限りひきこもり、金が尽きたらまたバイト、を繰り返す生活をしています。

#### 「花猫ぶろぐ」<http://hatena.ne.jp/hananeko51/>

#### 吉田一平(よしだ・いっぺい)

一九七六年京都市生まれ。フォークシンガーとして地元のアライブハウスを中心に活動。「対テロ戦争」に抗議するための音楽イベント「反戦ミュージック」を企画、二〇〇四年・二〇〇五年には京大西部講堂でも開催。その後「反戦と生活のための表現解放行動」にてサウンドデモの一翼を担う。二〇〇八年木の根にてバンド「Radical Tea Party」として「Go!三里塚ライブ2008 Return of GENYASAI」に出演。論文に「音楽と空間の弁証法」「サウンドデモ」「排外主義に抗する」など。

#### 千坂恭二(ちさか・きょうじ)

一九五〇年大阪生まれ。思想史。本誌編集委員。著書『歴史からの黙示』(田畑書店)、共著『ドイツ・ニューシネマを読む』(フィルムアート社)、論文に「総破壊の使徒バクニン」「ニーチエ、悲劇の誕生とアリアドネ」「シユティルナーと物象化論」「シェーンベルクとファシズム」「エルンスト・ユン

ガーの体験」「蓮田善明・三島由紀夫と現代の系譜」「二九八年の戦争と可能性」(本誌創刊号)、「内的体験としての暴力」(本誌第三号)など。

#### アラン・パティウ(Alan Badiou)

一九三七年モロッコのラバトに生まれる。哲学者、劇作家、小説家。高等師範学校(ENS)に学び、パリ第八大学、国際哲学学院などで教鞭をとり、現在も執筆活動を続ける。著者に「主体の理論」「存在と出来事」「諸世界の諸論理」(いずれもスイユ社)など。日本語訳書に『ドゥルーズ』『倫理』『聖パウロ』(いずれも河出書房新社)、『哲学宣言』『世紀』(いずれも藤原書店)、『ベケット』『サルコジとは誰か』(いずれも水声社)など。

#### 松本潤一郎(まつもと・じゅんいちろう)

一九七四年東京生まれ。同人誌『ゲストハウス』寄稿者。翻訳書にアラン・パティウ『倫理』『聖パウロ』、スラヴォイ・ジジエック『イラク』『ロベスピエール』、毛沢東、アルフォンソ・リンギス『異邦の身体』、ピエール・クロソウスキー『かくも不吉な欲望』(いずれも共訳、河出書房新社)、パティウ『世紀』(共訳、藤原書店)、ピーター・ホルワード『ドゥルーズと創造の哲学』(青土社)など。論考に「自然とその倒錯 黒田喜夫の離接的综合」(『ゲストハウス』二〇一〇年一月臨時増刊号)など。『ゲストハウス』近刊号に「ひめやかな奇跡 キプリングのいくつかの短編に触発されて」を掲載予定。